



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	チャウシェスク体制下におけるクリアーヌの文学創作
Author(s)	奥山, 史亮
Citation	基督教學, 48, 28-32
Issue Date	2013-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62405
Type	journal article
File Information	02okuyama.pdf



チャウシエスク体制下におけるクリアーヌの文学創作

奥山 史 亮

本発表は、ヨアン・ペトル・クリアーヌ (Ioan Petru Culiannu, 1950-91) が亡命前にチャウシエスク体制下で創作した短編小説から、キリスト教の神秘思想家として知られる十字架のヨハネに関する記述を抽出し、その特徴を整理する。そのことにより、社会主義体制下においてクリアーヌが宗教的表象にこめた意味を明確化する。資料としては、一九六〇年代後半から一九七二年の亡命直前の時期に執筆されたと思われる二編の短編小説『マイア』(Mia) と『夜』(Noapte) を取り上げる。

クリアーヌはブカレスト大学在学中に幾人かの友人たちと協力して文学サークルを組織した。このサークルは、過激な反体制運動を目的とするものではなかったが、入

手困難であった外国文学のまわし読みや禁止されていた文献の講読などを行っていた。さらに、『年代記』(Cronica) や『明星』(Luceafărul) とどう機関誌をつくり、各メンバーが執筆した小説を掲載し刊行していた。しかし、一九六九年後半から一九七〇年にクリアーヌが秘密警察への協力と加入を拒否すると、文学サークルの活動は秘密警察の厳しい監視下におかれるようになった。さらに、一九七一年にチャウシエスクが毛沢東の文化革命を手本に文化統制を強めるようになると、活動の継続は事実上不可能となった。

二〇〇二年にルーマニアのポリロム社から刊行された『逃走の技法』は、この文学サークルにおいてクリアーヌが執筆した作品を収録した短編小説集である。各作品の分量は二―三ページ、長いものでも一〇ページほどである。内容に関しては、本書序文の執筆者ダン・ミハイレスクによれば、時空間(＝社会主義体制下)からの脱出に関する表現を確認できる作品が多く、クリアーヌの反体制的な見解が透けて見える傾向にある。

その傾向が顕著な作品に『マイア』と『夜』という

短編小説がある。『マイア』は、機関誌に掲載されたと思われるが、その機関誌のタイトルは、クリアーヌが記憶しておらず不明である。一方、『夜』は亡命直前の一九七二年に書き上げられ、サークルの活動が停止していたため、未発表となった作品である。本作品は小説というよりは、『マイア』に関する註解であり、両作品は密接な関係を有する。

『マイア』の主人公はオスカル・チェリアという名前の男性で、舞台はルーマニアの都市部である。本作品の動詞の多くは、三人称の現在形、未来形で記されており、特徴的な文体である。語り手については言及されず、語り手がストーリーに関わることはない。オスカルは機械工学部を優秀な成績で卒業し、将来を有望視されている。あるとき、オスカルはモナという名前の女性と出会い、親しくなる。ふたりは同棲をはじめ、モナは妊娠する。しかしオスカルは出張先へ向う電車のなかでマイアという女性と出会い、彼女に惚れ込む。オスカルはモナに一方的に別れを告げ、マイアと同棲するようになり、平凡ながら幸せな生活をおくる。しかしある年のクリスマス、

マイアは病院に運ばれ、そのまま病死する。オスカルはマイアを失った悲しみから精神疾患に陥る。

物語は、オスカルが狂気を患う記述のあと最終部に入るが、話の場面が大きく切り替わる。そこでは、いままでの出来事がすべてオスカルの夢のなかでの出来事であったことが述べられる。夢から覚めたオスカルは、起き上がって明かりを求めるが、なにも見えずなにも聞えない暗闇のなかにいることに気がつく。暗闇から抜け出すことを試み、夢のなかの人物であるのか現実の人物であるのかもわからないマイアの名前をよび、救いを求めるうちに物語は終わる。

このような『マイア』の内容について、クリアーヌが数年後に註解を試みた作品が『夜』である。『夜』の冒頭では、『マイア』を執筆した当時の思い出と原稿を発見するにいたった経緯が説明される。「私の物語には、ある闇の表象が絶えずつきまとっていた。その闇のなかに登場人物たちは飲み込まれ、もどってくることができなかった。闇に関する一編の小説に『マイア』がある（それは、タイトルは思い出せないが大学の小難しい雑誌に

掲載されたが、一般には出回らず未発表であった」。クリアーヌは冒頭から自身の描く闇のイメージについて注意を促している。さらに上記の引用箇所において「マイアという小説は、結末の前までは陳腐なものである」と述べることで結末の闇に関する描写が重要であることを強調し、オスカルが夢から覚めたあとの記述をそのまま引用している。

クリアーヌはオスカルの暗闇について、ある宗教家や神秘思想家が用いる宗教的表象に比せられると説明している。そこで言及されている宗教家のうち、最初に名前があげられ、言及される数をもっとも多いのが、スペインの神秘思想家である十字架のヨハネである。クリアーヌは、『マイア』で描いた暗闇は十字架のヨハネの「暗夜」と同一のものではないと述べながらも、オスカルの体験を「十字架のヨハネが語ったかの感覚の暗夜に沈み込む」ようなものと説明している。さらにクリアーヌは、「感覚を棄て去ること、そこでは常に光りを求めないわけにはいかない恐ろしい煉獄のような荒野、同時に人々が永遠に生まれ、「なにかを」望み、愛し、死んでいく瞬間

をあらわしている」と説明する。

既述のように『夜』の註解は学問的厳密性を有するものではなく、この記述のみによって『マイア』の闇のイメージと十字架のヨハネの「暗夜」との関連性を特定することは困難である。しかし魂が神にいたる過程について、暗闇のなかで愛する女性をもとめる過程にたとえて描いた十字架のヨハネの「暗夜」は、『マイア』の暗闇のイメージに着想を与えたことが推測される。

十字架のヨハネの複雑な作品と思想について、テキストを丹念に読解することもなく要約することは困難かつ危険な行為であるが、本発表は十字架のヨハネ研究を目的とするものではないので、先行研究（鶴岡賀雄『十字架のヨハネ研究』創文社、二〇〇〇年）を参照することで概観を試みる。十字架のヨハネは一六世紀スペインの神秘思想家である。ヨハネの主著は、『カルメル山登攀』『暗夜』『霊の賛歌』『愛の生ける魂』の四作品とされる。いずれも自作の抒情詩に対して自ら註解を施すという形式で書かれている。上記の著作のうち『カルメル山登攀』と『暗夜』は、「暗夜」と通称される一編の詩について

の註解であり、当初は一冊の著書として完成させる予定であったという。

『カルメル山登攀』の冒頭には、「魂がいち早く神との合一にいたるにはどのように処したらよいかを論じる」という目的が記されている。鶴岡によれば、これはヨハネの著作すべてを貫く基調テーマであるという。魂の神との合一を成就するためには、魂が浄化される、すなわち、魂が神のみに向う状態を整える必要がある。ヨハネはこのような状態を整えるために、神との合一に資することのないあらゆるものを否定していく。すなわち、知性や感覚によって得られるものすべては、神とのあいだにいかなる連続性ももたないゆえに否定される。しかしヨハネは、すべてを否定したあとに、知性や感覚に依らない信仰、神への愛が肯定すべきものとしてあらわれるという。

「夜」というイメージは、このようなヨハネの思想を象徴するものとして描かれている。光りが欠如しており、なにも見えずなにも聞こえない「夜」は神の不在をあらわす。しかしヨハネにとっては、「夜」は神の不在のみ

をあらわすのではない。ヨハネによれば、神の絶対の不在を自覚することは、神とのなんらかの関係性をもたなければ生じ得ない。ヨハネは、神と魂の隔たりは無限であるため、魂は神を不在として愛するしかないが、神への愛は神の現存なしには生じ得ないため、神の不在は神の現存である。そのためヨハネの「暗夜」は、神の不在と同時に神の現存をあらわすという。

ヨハネのこのような「暗夜」について、チャウシエスク体制下にあったクリアーナがどの程度把握していたのかは定かではない。しかし、ヨハネの「暗夜」を念頭におきながらクリアーナが『マイア』の夜のイメージを描いたという仮説にたつならば、『マイア』に関する幾つかの解釈が可能になる。『マイア』の結末は、一見すると救いがないように読める。マイアの死亡や精神疾患が夢の出来事か現実の出来事かは定かでないが、主人公のオスカルは暗闇からぬけ出せないままに物語が終わっている。この暗闇について、チャウシエスク体制下の社会をあらわしていると読むことは解釈として可能であろう。

しかし、『マイア』の夜のイメージをヨハネの「暗夜」

と重ね合わせると、体制に対する単なる批判以上のことを読解することができると思われる。十字架のヨハネがいうように「夜」が神の不在であると同時に現存をあらわすならば、オスカルは暗闇のなかで神の現存にたちあっていることになる。これは、どれほど厳しい情報統制を実施しようとも、神との関連性、神を愛するという行為を人から奪うことは不可能であるというクリアースの信条をあらわしていると考えられる。

研究発表要旨

ドイツ・バイエルン州公立学校の 宗教科にみる「他者」表象の変遷

石 川 智 子

はじめに

「多元化」や「グローバル化」が喧伝される現代社会において、「他者」をめぐる問題はさまざまな局面で現実さを増しているといえる。本発表では、現代社会における宗教的な「他者」表象の一端を明らかにするため、ドイツ・バイエルン州の公立学校で実施されている宗教科において、他宗教、他宗派、他の宗教的諸潮流といったテーマがどのように描かれているのか、その時代ごとの変遷を分析していく。なおここでは主にイスラームと仏教・ヒンドゥー教および他の宗教的諸潮流に関する内容に着目して、カトリックおよびプロテスタント宗教科を比較していくことにしたい。